
僕の彼女はあの...

marta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女はあの…

【Nコード】

N7659Y

【作者名】

m a r t a

【あらすじ】

いつも通りの生活を送る少年が美少女を助けたおかげでいろいろな事に巻き込まれていく…学園ラブストーリー

出会い。

今はいつも通り通学途中。
今日も学校だ。

僕は近頃、携帯小説といわれるモノにはまっている。

友達はバカにするが。
だから何だ？

彼女居ない歴〃17年〃年齢

ハマるのも仕方ないだろ。

こんな幼馴染がいたらな、とか、

運命の出会いとかないかなとかを思いながら
近頃過ごしている。

10分後に叶うとは知らずに。

ここは、学校の最寄駅。

いつも通り改札を出て学校へ向かう。

だが、今日はいつもの通学路とは少し違った。

僕が異変に気付いたのは30m先に見た目が「俺ら不良」と叫んでいる、集団を見つけたからだ。

はあー

絡まれなきゃいいや、と思いつつ素通りする事にした。

だが、よくみると、

真ん中にあいつらの友達とは思えない俗に言う美少女という女の子がいた。

というよりも、囲まれていた。

「ちよつと、やめてよ。」

「いいじゃん、俺たちひまなんだよ」

まあ、僕には関係ない。

進路の変更はない。学校へ

だが、好奇心という欲に負けてチラッと見てしまった。

ヤバイ…目が合った

不良と？ 違う。

では…そう
美少女と。

目が合った

と、言うよりも見つめられた。

生まれつき、人の心を読むのに難がある僕であるが、彼女が僕に訴えかけていた事はわかった。

助けて…だ。

僕にも良心と呼ばれるモノはある。

ここで助けに行く事も出来る。

だが、めんどくさい。

助けたからといってなんのメリットがあるだろうか？

彼女になつてくれるとでもいうのか？

期待するだけ無駄だ。

それに遅刻寸前だ。

今日だけカッコいい事もしてみるのはどうか？と、誰かが頭の中でささやいた。

そうだな。今日だけ。いつか報われる。そう信じて…

「おい。兄弟

いくらモテナイからって、

そこまでする事ないっしょ。は他から見て哀れみを感じるよ。」

自分でも

皮肉の才能あるなとつくづく思うよ。

「は？何だお前？てか誰？」不良A

「カンケーないのは、学校イキナ」不良B

「ボコらりたいの？」不良C

学校行った方がいいのは
お前らの方だろ（笑）

「もう一度言ってあげる。

理解できてなさそうだから、

あ・わ・れ…」

いい終わらないうちに不良Aが殴ってきた。

出た。大振り。

顔を横に傾ける。そして、足を掛け投げる。

あと2人。

今度はドロップキックときた。不良C

当たるギリギリまで耐える。

今だあのゲームで同じみ緊急回避というものをとった。

そして、Cの着地点には倒れてるAが…

どかつ A 戦闘不能。

友達思いじゃないCに軽くケリ。

C 戦闘不能。

ふう。あと1人。って

逃げてるし（笑）ま、いつか。

現在 8 時 27 分。 ヤバイ遅刻。

バックをとり学校へと方向転換して
走り出そうとしたとき

「あのーありがとうございます」ペーり。

あっそっか。いたもう一人。

たしかあの子は…

そっか。助けたんだっただ…

「本当に、ありがとうございます」

静かに振り返ると、そこには、茶色のロングヘアで長身のモデルみたいな子が立っていた。

よくみると、
本当にかわいい…
絡まれるわけだ。

「け、怪我はありませんか？」

「特に無いから、
心配しないで。それより急いであるから
気を付けて」

「ねえ、お礼したいんですけど…
メアドだけでも教えて」

「あー、本当にゴメン
学校行かなきゃいけないんだ」

そして、全力で学校へ走りだした。
なぜ聞かなかったって？
だって、今日で3日連続遅刻だからさ。
さすがにまずいだろ…

その日は最悪だった。

生徒指導室に呼ばれ、反省文をたっぷり書かされもうクタクタだ。

明日は、10分早く家出よ。

静かに決心した。

あー眠い

てか今何時？

8時？はっ？嘘だろーーーーーーーーーーーー

おい

タケル（目覚まし時計のなまえ）

何で起こさなかった？

あっ、電池切れてた。

ふう、間に合った。

今は朝日のHRだ。

「みんな着席し知ってると思うけど、今日から転校生が来るから。佐々木さん入って。」

「おい。転校生って知ってた？」

「先生、前言ってたじゃん。」

聞いてなかったの？女子らしいよ。」

今話かけたのは、前の席に座ってる一応親友って存在の田中。

「あつ、来たよ」

教室の男子からはコソコソ話声が

「やば、かわいくない？」

「マジだ」

女子は

「キヤーかわいいー」

など叫んでる。

前を見る。

そこには、何処かで見た事ある顔が…

「今日から、ここに入る佐々木結衣さんです。みんな、仲良くしてあげてね。じゃあ何かひと言。」

「んーと、佐々木結衣です。」

これからよろしくお願いします」

「「はい。」」

「じゃあ席は、あそこね。」

「はい。」

やっぱり何処かで見た事ある。

えっ、こっちに歩いて来る。

「よいしょっと」

転校生がとなりの席にちょこんと座った。

「これからよろしく。」

ニコツと微笑みながら言われた。

「あつ、はい。」

そして、口パクで

「キノウハアリガトウ」
と言った。

ああー————————

思い出したあー

昨日の子だ。

それから、あの子とは今日話さなかった。
一日中質問責めにあっていた。

そして校内では噂の美少女だ。

予想外の出来事

ブー、ブー、携帯が鳴る。

「誰だよ？朝っぱらから電話する奴は？」

現在土曜午前11時。大切な休日の朝を非常識極まりない奴によつて起こされた。

眠い。携帯を見てみると、知らない電話番号が表示されてた。誰？

出るか出ないか迷ったが好奇心から出る事にした。

「はい。もしもし。」

「あつ、出た。もしもしー、起きてる？今日ひま？」

女子の声だ。

「今日は…暇だけど、誰？」

「あつ、そつか。番号知らないんだっけ？」

私よ、私。ほら、金曜日転校して来たでしょ。結衣よ。覚えてないの？」

覚えてるけど、何で番号知ってるの？

「いや、覚えてるけど、何で番号知ってるの？交換してないよね？」

「それは、秘密。」

「じゃあ、1時に立川駅集合ね。」

「ちよつ、ちよつと待ってよ。俺いつ遊ぶって言った？」

「え、さっき今日ひまって言ってたじゃない。じゃあ、後でね。ブチ」

「切れた…」

今どうなってるんだ？

大至急で頭を整理する。

ああーいやなほむほみめ、や

大変だ。どうする？

行く？いや、わけわからん。
ドタキャン？それは、最悪。
行くしかないのか…

急いで用意する。

まずは、風呂入って、トイレして、歯を磨い…

さて、服はどうするか…

ジャケ？いや、そんな気分じゃない。

セーター？違う。

無難にパーカーにしとくか。

いろいろ迷った末、思いついたコーディネートを上から紹介しよう。
シャツの上にプルオーバー。

黒いジーンズを下折り曲げる。

ティンバーランド。

そして、黒ぶちの伊達メガネ。

どう？悪くないでしょ。

と、鏡に映る自分を勇気づけ家を出る。

現在12時45分前。ちょっと、早く来すぎたかな。

待ち合わせ場所は確かここだから、待ってればいいや。

イヤホンを付けて音楽を聴く。

五分経過…

トントン。誰かに叩かれた。イヤホンを外す。

「た、たくみ君？」

上目遣いで女子に見られてる…

蛇に睨まれたカエル状態だ。

「えっ、あつ、佐々木さん」

「あつ。良かった。何かいつもと雰囲気違うからわからなかった。」

いつもとつて、二回しか見てないだろ…まあ、いいや

「いやー、よかったー。」

「何が？」

「いや、だって、来て…」

最後の言葉がフェードアウトしてて聞き取れなかった。

「えっ？ごめん。聞こえなかった。」

「えっ、来てくれないかと思ったの！何度も聞かないで…」

「あつ。ごめん。」

何で怒られなきゃいけないんだよ。

けど、良く見ると私服も可愛い。

赤いセーターがよく似合ってる。

「で、今日はどうしたの？」

「あつ、そうそう。私こっちに引つ越して来たばかりでしょ？」

だから、この辺案内してもらおうかと思って。」

「分かった。けど、何で俺？」

「だって、前みたいにかまれたら、助けてもらえるように。」

そういう事か。なら俺じゃなくて、別の男子に頼めばよかったのに。

例えば、柔道部の高橋とか？

あいつならどこでもすつ飛んでくると思うし。

「わかったけど、何で俺？」

別の男子も居たる？連絡先交換してないの？」

「してないわよ。たくみ君以外。」

私、いろいろな男子にホイホイメアド教えるような、軽い女じゃないわよ。ふふ。」

「わかりました。」

俺も交換してないぞ。思わず言いそうになった…

「で、どこ行く？買い物？映画？」

「んー、

見たい映画あるんだけど…」

「わかった。じゃ、こっち。」

今日は日曜日ともあって人が多いな。

何か、今日は当人比10倍もの視線を感じるのは気のせいだろうか…

「着いたよ。」

「あつ。ここか。」

「で、何が見たいんだたつけ？」

「あれ。」

「えっ、あれ？」

指の先には、レースの映画のポスターがあった。

「何か不満？」

「えっ、いや、特に何も不満じゃないけど。じゃ、チケット買いに行こう」

別に不満だったわけじゃない。

ただ、てつきり、

女の子だから恋愛モノを見るものばかり思ってた。まあ、レース俺も好きだし、いいか。

「ねえ、面白かったでしょ？あれ」

「あー、ごめん。寝てた。」

そりゃ眠いだろ、朝早く起こされたのだから。

「はあ？何それ？」

「サイテー」

「はい。ごめんなさい。」

「まあ、いいわ。ねえ、お腹空かない？」

確かに空腹だ。何故なら朝食食べてないから。

「じゃ、マックでも行く？」

「うん。」

「いらっしやいませ」

何になさいまって えー？

匠じゃん？そして、えー？さ 佐々木さん？」

ヤバイ。

非常にヤバイ。何故ヤバイかって？

そんな理由一つしかない。

目の前にクラスメイトの鈴木がいるからだ。

しまった。鈴木がマックでバイトしてる事でつきり忘れてた…

どうしよう。このままだと完璧に誤解される…

「私達、幼なじみなの。」

ナイスフォローなのか？

「あつ。そういう事か。」

で、注文は？」

良かった。納得してくれたようだ。

そういえば、あいつバカだったんだ。

「私、ビックマックとマックナゲットとポテトで。あつ、あとオ
レンジジュース。たくみ君は？」

すげーカロリーだぞ？いいのか？

誰が見ても肥る事くらいわかるぞ？

「えっ、匠と一緒にじゃないの？まあ、いいや。」

鈴木もびっくりしてる。

そりゃそうだ。男が頼むならまだしも、目の前で、注文してるのは
女の子だぞ？しかも華奢で、美人な。

「じゃあ、ダブルチーズバーガーとコーラで。」

「ふう、お腹いっぱい。」

「まあ、そうだろうね。」

さつきから聞きたかった事を聞いて見る事にした。今聞かなきゃ夜
気になって眠れない。

「一つ聞いていい？」

「なに？私に答えられることなら、いいわよ。」

「いつも、そんなに食べるの？」

「んー、今日は少ない方よ。何か文句ある？」

「いや、ありません。」

ちよつと、今日は疲れたな。

そろそろ帰るかな

「じゃあ、帰るか？」

「そうね、家まで送ってくれる？」

「はい。わかりました。お嬢様。」

「ん？何か言った？」

「いえ、何も。」

睨まれた。ていうか、もう上下関係が確立されつつあるのか？
先が思いやられる…

「へえ、家ここなんだ。結構でかいね。」

というよりも、ミニチュアの豪邸？

「そうかしら？」

上がってく？」

「遠慮しておきます。」

「そう。乗りが悪いわね。」

「何とでも言って下さい。」

「まあ、今日楽しかった

ありがとね。付き合ってくれて。」

「別に、いいよ。暇だったし。

楽しかったし。」

「本当？良かった。じゃあ、私と友達になっくれますか？」

「もちろん。じゃあね。」

「じゃあね」

あの子が家に…

ふう、今日も遅刻ギリギリ学校着。

だが、今日はいつもと雰囲気が違う…

すれ違う人みんな俺を見てこそこそ話している。

自意識過剰なだけだろうか…

ならいいけど…

「おはよう」

前に座ってる田中に声掛けながら席に着く。

「おっ、噂の匠くんじゃん。

おはよう」

「噂って…もしかして…」

「幼なじみなんだってな？匠と佐々木さん。」

なんだそれか。くると思ってたぜ。

そう思ってシナリオは昨日の夜に考えておいたのさ。

俺って、できる男（笑）

「そうなんだよ。てか、もしかして校内に広がってる？」

「当たり前だよ。で、いつから？」

幼稚園？それとも小学校？」

「えーと、確か幼稚園だったかな？」

「へえ、そうなんだ。で、どうなの？」

「何が？」

「だから、付き合ってるの？」
「はあ？」

まさか、付き合ってたねーよ。」

「本当か？」

「あんな美人だぜ？」

「だな」

噂の美人が登場。

向こうも質問責めにあつてある。

「へえ、結衣ちゃんって匠くんと小学校が一緒だったんだ」

ヤバイ。つじつまが合っていない…

明らかに田中も悩んでいる。

来るぞー 来るぞー

「なあ、お前さっき幼稚園からとか言ってたかったか？」

キター

「えっ、そうだったわけ？向こうは気づいて無いみたいだけど、実は幼稚園からだったんだ。」

「そういう事か。」

あぶねー。

「おはよう、昨日はありがとう。」

匠くん。ふふ

「こちらこそ。」

「やっぱ、君たちそうゆう仲？」

「ちげーよ」

「ふふ。」

全力で否定。

てか、佐々木さんも微笑んでないで否定してくれ…

昼休み

腹減った

「おい、田中。昼食べようぜ?」

「オッケー」

田中が机を動かしてくつつける。

「私も一緒にいい?」

はっ? 何言ってるの… 佐々木さん

「え、どーぞ どーぞ」

おい、田中やメロ。

確かに男にとっては最高に幸せなひと言だという事は百も承知だ。

だが、周りの視線というモノを考えて欲しい。

「「いただきます。」」

もう、遅かった…

仕方なく俺も朝買ったコンビニを出す。

「いただきます…」

視線が痛くて美味しく食べれない。

女子 興味

男子 嫉妬

両方の意味でマズイ…

「匠くんってコンビニ弁なの？」

「えっ、ああ

俺ひとり暮らしだから。」

「へえ、それでコンビニ弁…
体に悪いわよ？」

「知ってる。」

その時俺は見逃さなかった。

彼女が何か思いついた顔をしたのを…

「こいつの親、世界を飛び回ってんだ」

「へえ、そうなんだ」

放課後

さあ、帰るか。

「帰らないのか？田中」

「わりー、今日俺委員会」

「そっか。」

「うん。またな」

ひとりで帰るか。

確か、冷蔵庫の中何も無かったな…
買い物してくか。

「ねえ」

「ねえってば」

んっ、俺か？振り返る。

「無視しないでよね」

「悪い。そんなつもりは…」

「ねえ、一緒に帰ろ？」

「誰と？」

「はい？誰って、目の前にいる人よ」

「俺？」

「そう。あなた」

「んー、今日買い物していかなきゃなんないんだ。」

「うそっ、じゃあ、私の得意分野ね。」

行きましょ」ニコッ

はあ 抵抗しても無駄か…

家

「ねえ、冷蔵庫開けていい？」

「好きに使って」

何で彼女が家に居るかって？

言わなくてもわかるだろう。

今日の夕飯は私が作ると言い出したからだ…

こんなところクラスの奴に見られたら…

想像もしたくない。

「「ごちそうさまでした」」

ちなみに鍋だった。

そして、佐々木さんは料理が上手だった。

「匠くんの家って筋トレジムみたいね」

「そうか？まあ、トレーニング用品しかないな。」

「ゲームとかしないの？」

「んー、しない。小説は読むよ。ほら。」

本棚を指差した。

「うわあ、結構読むのね。」

「近頃は、携帯小説にハマってるけどね。佐々木さんは本読むのか？」

「私？たまにね。携帯小説って、運命の出会いとかに憧れてるわけ？」

図星だ…

「俺の自由だろ」

「ふーん」

「何、にやついてんの？」

「別に。今何時？」

「んーと、9時前」

「もうそんな時間か…じゃあ、帰るねー」

「あっ、駅まで送ってくよ」

「おっ、紳士だね」

「やっぱ、やめた」

「ごめーん。」

「はいはい。」

2人で駅まで歩く…

「ねえ、匠くんって武術とかやってるの？」

「ひみつ」

「ひどーい」

「鍋美味しかったよ」

「えっ、ありがとう。どう？お嫁さんにしたい？」

「優しい子がいい。」

「なにそれ？じゃあ、明日はコンビニ弁当買わなくていいからね。
じゃあね」

「じゃあ…」

いい終わらない内に走って改札に行ってしまった…

どういう意味なんだ。

もしかして…もしかしてか？

やめてくれーーーー

それだけはやめてくれ。

うう、胃が痛い…

家帰って寝よ。

明日にならなふう、今日も遅刻ギリギリ学校着。
だが、今日はいつもと雰囲気が違う…

すれ違う人みんな俺を見てこそこそ話している。
自意識過剰なだけだろうか…

ならいいけど…

「おはよう」

前に座ってる田中に声掛けながら席に着く。

「おつ、噂の匠くんじゃん。

おはよう」

「噂って…もしかして…」

「幼なじみなんだってな？匠と佐々木さん。」

なんだそれか。くると思ってたぜ。

そう思ってたシナリオは昨日の夜に考えておいたのさ。

俺って、できる男（笑）

「そうなんだよ。てか、もしかして校内に広がってる？」

「当たり前だよ。で、いつから？」

幼稚園？それとも小学校？」

「えーと、確か幼稚園だったかな？」

「へえ、そうなんだ。で、どうなの？」

「何が？」

「だから、付き合ってるの？」

「はあ？」

まさか、付き合ってたねーよ。」

「本当か？」

「あんな美人だぜ？」
「だな」

噂の美人が登場。
向こうも質問責めにあつてある。

「へえ、結衣ちゃんって匠くんと小学校が一緒だったんだ」

ヤバイ。つじつまが合っていない…

明らかに田中も悩んでる。

来るぞー 来るぞー

「なあ、お前さっき幼稚園からとか言つてなかったか？」

キター

「えっ、そうだったけ？向こうは気づいて無いみたいだけど、実は幼稚園からだったんだ。」

「そういう事か。」

あぶねー。

「おはよう、昨日はありがとう。」

匠くん。ふふ

「こちらこそ。」

「やっぱ、君たちそうゆう仲？」

「ちげーよ」

「ふふ。」

全力で否定。

てか、佐々木さんも微笑んでないで否定してくれ…

昼休み

腹減った

「おい、田中。昼食べようぜ？」
「オッケー」

田中が机を動かしてくつつける。

「私も一緒にいい？」

はっ？何言ってるの…佐々木さん

「え、どーぞ どーぞ」

おい、田中やメロ。

確かに男にとっては最高に幸せなひと言だという事は百も承知だ。

だが、周りの視線というモノを考えて欲しい。

「いただきます。」

もう、遅かった…

仕方なく俺も朝買ったコンビニ弁を出す。

「いただきます…」

視線が痛くて美味しく食べれない。

女子 興味
男子 嫉妬

両方の意味でマズイ…

「匠くんってコンビニ弁なの？」

「えっ、ああ

俺ひとり暮らしだから。」

「へえ、それでコンビニ弁…
体に悪いわよ？」

「知ってる。」

その時俺は見逃さなかった。

彼女が何か思いついた顔をしたのを…

「こいつの親、世界を飛び回ってんだ」
「へえ、そうなんだ」

放課後

さあ、帰るか。

「帰らないのか？田中」

「わりー、今日俺委員会」

「そっか。」

「うん。またな」

ひとりで帰るか。

確か、冷蔵庫の中何も無かったな…
買い物してくか。

「ねえ」

「ねえってば」

んっ、俺か？振り返る。

「無視しないでよね」

「悪い。そんなつもりは…」

「ねえ、一緒に帰ろ？」

「誰と？」

「はい？誰って、目の前にいる人よ」

「俺？」

「そう。あなた」

「んー、今日買い物していかなきゃなんないんだ。」

「うそっ、じゃあ、私の得意分野ね。」

行きましょ」「ニコッ

はあ 抵抗しても無駄か…

家

「ねえ、冷蔵庫開けていい？」

「好きに使って」

何で彼女が家に居るかって？

言わなくてもわかるだろう。

今日の夕飯は私が作ると言い出したからだ…

こんなところクラスの奴に見られたら…

想像もしたくない。

「「ごちそうさまでした」」

ちなみに鍋だった。

そして、佐々木さんは料理が上手だった。

「じゃあ、帰るねー」

「あつ、駅まで送ってくよ」

「おつ、紳士だね」

「やつぱ、やめた」

「ごめーん。」

「はいはい。」

2人で駅まで歩く…

「ねえ、匠くんって武術とかやってるの？」

「ひみつ」

「ひどーい」

「鍋美味しかったよ」

「えっ、ありがと。どう？お嫁さんにしたい？」

「優しい子がいい。」

「なにそれ？じゃあ、明日はコンビニ弁当買わなくていいからね。
じゃあね」

「じゃあ…」

いい終わらない内に走って改札に行ってしまった…

どういう意味なんだ。

もしかして…もしかしてか？
やめてくれ……
それだけはやめてくれ。
うう、胃が…
家帰って寝よ。
明日にならないでくれ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659y/>

僕の彼女はあの...

2011年11月26日22時49分発行